

六甲カトリック教会 教会報



今、悩ましい「聖歌」の存在

教会と聖歌は切っても切れない関係のものだと思っていました。しかしコロナはこの関係をも断ち切ろうとしています。感染を防ぐために「信徒がみんなて歌を歌うこと」はいま我慢しなければなりません。結婚式も自粛、葬儀ミサは会衆が参列することは控えるようにされ、ご遺族と聖歌隊のみで静かに営まれます。緊急事態宣言中ではオルガンと独唱者一人だけでお見送りすることもありました。信徒の「きずな」はどうなっていくのでしょうか。

コロナ社会では「人をみたら感染が離れて過ごすことが奨励さ
タッチで、外食は横並びで仕
ル越し、集まって歌っ
メ、電車やバスに乗っ
めて下さいなどとは言え
「新しい生活様式」だそう
ようけど腑に落ちません。このよ
大切にしてきた人と人との交わりが
イルスが私たちの大切にしてきた「スキ
るのです。由々しき問題と言わねばなりませ

いづくしみ深い神よ
新型コロナウイルスの感染
拡大によって、いま大きな
困難の中にある世界を顧み
てください
「新型コロナウイルス感染症に苦し
む世界のための祈り」より
(2020年4月3日日本カトリッ
司教協議会認可)

者と思え」というわけで、人と人と
れます。握手やハグなどは肘タ
切り板付き、対面はビニー
たらダメ、踊ったらダ
て、お互いに座席を詰
なくなりました。これが
で、仕方のないことなんでし
うなことが長く続くと私たちが
こわれてしまいます。新型コロナウ
ンシップ」を否定するように仕向けてく
ん。

教会の結婚式では信徒の皆が「おめでとう」とことばを交わし祝歌を歌い、葬儀では信徒の皆が帰天された方を悼み、葬送の歌を歌う、そして平素のミサでは心を込めて聖歌を歌う、そのようなときが一日でも早く来るように祈るばかりです。(編集部)



主日ミサのスケジュール

| 月 | 日 | 曜日 | 時間 | 地区 (ブロック) |
|---|----|----|-----|-----------|
| 7 | 4 | 土 | 16時 | 灘北2、阪神 |
| 7 | 5 | 日 | 10時 | 灘南、神戸西 |
| 7 | 5 | 日 | 16時 | 灘西・中央 |
| 7 | 11 | 土 | 16時 | 東灘北1 |
| 7 | 12 | 日 | 10時 | 東灘北2・芦屋 |
| 7 | 12 | 日 | 16時 | 東灘南 |

お知らせ

- 7月後半の主日ミサ予定は週報ほかでお確かめ下さい。
- 6月14日(日)に予定されていた財務報告会は中止になりました。
- 7月12日(日)12時から小教区評議会(第1、2会議室)

新型コロナウイルスとのたたかいはまだ終わっていません。コロナへの思いを短歌と俳句に託したお二人の心情を、それぞれ綴っていただきました。

短歌6首

うす暗き聖堂正面キリスト像コロナの老機も周知と見ゆる

ミサ聖祭集うを止められ一人吾十字架を負うイエスと対面

コロナ禍の報道続き窓の辺の広がる桜花に心を移す

外灯に照らされ園に傷き上がる桜白々老樹の七本

咲く使命いま全うす老桜吾を見守りて七十年余

スーパームーン桜のあわいに輝きぬコロナウイルスに揺らぐ地癒し

コロナウイルスによる自粛が続き、趣味のための外出などがなくなつた代りに、夫との朝の散歩が以前より頻度高く距離も伸びております。御影山手の自宅から一王山、十善寺を経て境内裏手から丘を越え、神戸大学キャンパスを外周する道を巡り、六甲教会にたどり着きます。御ミサにあずかる事が出来なくとも、聖堂はいつでも誰をも招き入れて下さっていて、十字架上の

短歌

イエズス様と対面し感謝を献げ、コロナウイルスにより様々な形で苦しみを受けている方々を癒し救って下さるようお祈りして帰路にきます。家を出てから二時間

弱、約七千歩の行程です。始めた頃のみずみずしい樹々の若葉が、今やしつかりと緑濃く茂り、陽射しも夏へと変わって来ました。今ではコロナ自粛も解かれ日常がもどって参りました。三月からあずかれなかつた御ミサにもあずかる事が出来、御聖体をいただいた時は本当にありがたく自分の中心軸がもどったように感じたのでした。世界中に広がるコロナ禍によってそれぞれの方が様々に禍をこうむり、これまで当たり前と思っていたすべてのことが、神様からの賜り物であったことを改めて気づかされる機会になったと思っております。

磯井恵子

俳句2句

コロナ禍てふ世直しありぬ虫送り

マスクして世界に戦友ウイルス禍

2020年「コロナ」感染の流行下、強いられた行動自粛の生活の中で、ふだん前と思っていたものにしみじみ感謝を覚えたとか、よい事を始めたり学んだという方も多いと思う。また、世界に目を移すと「分断」による国内の問題を抱えていたり、とりわけ喫緊を要する国際問題では、利害の対立から明るい見通しが立たず、その間、弱者、弱国がおびただしく命や居場所を失ったり、地球の崩壊も始まっている。その報道をみていると地球と人類の未来に殆ど絶望してしまうほどである。そんな中で現れた新型コロナ、これが世界の、「秩序」を根底からゆさぶっているため、解決の糸口が見えてきたケースも少なくないと聞く(註)

人の手(話し合い、政治等)ではもはや絶望に近かつた問題に解決のきっかけを与えるコロナとは何者なのか。人類に災禍を及ぼす表の顔は持つにしても、人類に互いの尊重と協調を促し、かつその実行に導くパワーなのではないか、コロナウイルスとはある意味、神の「千の風」のひとつ。あるいは神の手と解せないだろうか。 柴田章彦

俳句

(註) コロナの感染拡大で2020年の温暖化ガス排出量は前年比8%減程度と過去最大の減少幅になるともいわれる。また国内では在宅勤務による通勤回数の減少で温暖化ガスの削減に大きく寄与したという(日本経済新聞6月19日付)

◆ 夏が来れば思い出す ◆

梅雨の長雨が続くが、時には梅雨の合間に暑い夏日が挟まる。教会のミサは有難いことに再開されたが、まだ数多くの厳しい制約付きである。今後の先行きは分からないが、ゆっくりと正常化に向かう大きな希望があるのではないか。この間はフロイスの日本史を読破したので、心にわだかまっている事柄をマトメテおこう、同じロヨラのイグナチオのへなちょこ同志として。かつての宣教師たちを批判したり、彼らのイエスの福音に賭ける熱誠を軽くみるからではない。むしろ心からの敬愛と讃嘆を表すためであり、命がけでイエスの福音に殉じた彼らの勇気と忍耐にアヤカル恵みを願い求めるからである。しかし同時にカトリック教会が神の絶えざる支えと導きによって、この400年余りをかけて新たな気づきを得、大きな成長と変貌を遂げた事実にも驚く他はない。その意味ではフロイスの日本史は、現代の教会にも大きな勇気を与え、考えこませ、時には真摯な反省を促し、新たな対応を求める起爆剤でもある。

まず、異宗や異教またその信奉者への対応である。偶像を崇拜し拝跪する者として、淫祠邪教に耽る者として一方的に決めつけ排斥し、ましてや神の劫罰を当然視することはイエスの心といえるのか。また人々が尊崇してきた僧侶や寺社や仏像やお札を、イエスの名のもとに嘲笑し廃棄し焼亡すること、また悪魔の手先である教役者に神の厳罰を希求することは、キリスト者の信仰が要求する当然の帰結ではない。批判や排斥の前に、どれほどの真剣で永い研鑽が必要であろうか。アナテマ シットという異端の排斥・断罪で結ばれた従来の公会議の宣言か

らは別離して、1965年に教皇が認可し公表した第二バチカン公会議の宣言によって、教会は諸宗教に対する尊敬と対話と協力とに大きく踏み出した。

次いで、キリスト者の存在や信仰の現実は、洗礼者の実数の増大や伸長に簡単に同一視してはならないと思われる。たしかに宣教師たちは、最果ての地を訪れ苦難に耐えて宣教に献身し、司祭・パードレも修道者・イルマンも自らの血潮と汗水と涙の最後の一滴も捧げ尽くした殉教者であった。彼らの信奉した秘跡論はかなり疑わしいかも。キリシタン領主に恵まれた領民が、喜び勇んでキリシタンになる洗礼を受けたことは歴史的な事実ではあるが、そのような集団行動が全くの自由な主体的な選びに基づいたか否か、上からの圧力や周りへの遠慮も大いに働いたかもしれない。誰でも洗礼を受ければ自動的に救われて天国に行き、誰でも受けなければ滅びて地獄に行くというのは単純すぎる。

第三に、イエズス会が踏襲したトップダウン方式は、当時の政治的で地域的な情勢からみて考えられる限り有効で可能な唯一の方針だったと思われる。こうしてザビエル自身まず京都のミカドからの許可書を得ることを志し、山口から京都への冬の旅を敢行した。戦国時代の荒廃したミヤコ、天皇の権威の失墜を前に、あろうことか中国の皇帝に拝謁して公許を願うつもりだった。以後の宣教師たちもこの戦略をおし進めた。こうして時代の覇者、信長や秀吉や家康から厚誼を得、宣教の許可を獲得した。しかし彼らが全国制覇を成し遂げた後は神格化・神や仏に勝る唯一の絶対者・独裁者に成り、仮借のない残忍な迫害者になる必然性には気づかなかったようだ。 中村健三 合掌



園芸だより



梅雨の晴れ間、8人の庭師達がグループに分かれ3カ所のミニガーデンのデザインをしました。教会のガーデニングの経験者であり、土いじり植物大好きな人の集まりです。水分補給の合図があっても、なかなか手を休めません。苗を大切に扱い、いかに美しくお花を見せるかを心がけながら夢中になって仕上げていきました。池の周りには、開花し始めたアガパンサス、ヒメヒオウギスイセン、メドウセイジ、ブルーセイジの足元にジニア、マリーゴールド、ブルーデージ等を取り合わせました。

信徒会館前は夏の主人公であるコリウスを中心にセンニチコウ、ペチュニア等、色合わせに試行錯誤しながら力強く華やかなエリアになりました。日本庭園のスペースには、バックヤードで保護していた今年のキキョウ、カワラナデシコ、ホオズキを寄せ植えにし、隙間に可愛い白のアレナリア、ミニの小菊をあしらひ、落ち着いた雰囲気になりました。

園芸係は、コロナ自粛が続く最中も毎週お手入れに教会を訪れていました。サクラの開花から始まり街路樹のサツキ、庭木や草花は、例年より色鮮やかになっていました。車の交通量は減り、飛行機は飛ばなくなっていました。二酸化炭素の排出量が減っていたのです。

私達は、教皇様の環境問題の提議を痛感し、小さな事からですがゴミの削減を進めています。

施設管理部園芸係 貴島せい子



| | |
|---|---------------------------------|
| 次回8月号の発行は、8月1日(土)です。 | 六甲カトリック教会 |
| 原稿は毎月15日ごろまでに教会受付へ直接ご持参いただくか、FAX やメールでお願いいたします。皆様からの原稿をおまちしております。 | 〒657-0061 神戸市灘区赤松町3-1-21 |
| (広報部) | 電話 078-851-2846 |
| http://www.rokko-catholic.jp | F A X 078-851-9023 |
| | E-メール renraku@rokko-catholic.jp |
| | 発行責任者 アルフレド・セゴビア |
| | 編集 広報部 |